

研究所第 17 回フォーラム

「みんなで楽しく発達するパフォーマンス心理学入門」

茂呂 雄二(東京成徳大学応用心理学部)

【編集注】第17回フォーラムは、オンラインツール Zoomを用いて開催いたしました。地の文は、講師である茂呂雄二先生のご講演内容、「――」の後に記載される内容は、参加者の発言・書き込みです。

東京成徳大学の茂呂といいます。どうぞよろしくお願ひします。今日、パフォーマンス心理学について話をさせていただきます。後でもまた詳しく述べますが、パフォーマンス心理学というパフォーマンスとは、普段やらないことにあえてチャレンジしてやってみる、そのような意味です。

ウォーミングアップ：インプロゲーム

まず、ウォーミングアップのために、Zoomを利用したゲームを行い、それで少し体を温めたいと思います。パフォーマンス心理学の中では、インプロあるいはインプロゲーム、即興遊び、そのようなものを使ってアイスブレイクをしたり、エンカウンターを果たしたりすることが多いです。そのインプロゲーム、即興遊びをやってみたいと思います。

皆さんは今、マイクオフ、カメラオフですが、これから、私が簡単な文章を申し上げます。それに当てはまる、私もそうだという人はカメラオン、マイクオンにしてください、「私も!」と大きな声で言っていただきたいと思います。私が何か簡単な文を言いますので、それに当てはまるという方はマイクオン、カメラオンで顔を出していただいて、「私も!」と言っていただく、そのようなゲームです。では、ちょっとやってみましょう。

私は猫派ではなく犬派だ。どうぞ皆さん、当てはまる方はマイクオン、カメラオンにしてください。

―― はい、そうです。

―― はい。

―― はい、そうです。

「私も!」と言ってください。

―― 私もです!

―― 私も!

―― 私もです!

(カメラオンの人数を数える) 4、5、6、7、8、9、10。あまりおられませんね。猫派が多いのでしょうか。では、もう一回、マイクとカメラをオフにしてください。次の文章です。今朝、納豆を食べた。どうでしょうか。

―― 私も!

―― 私も!

わずかお二人だけでした。納豆は、自粛期間中にたくさん食べ過ぎて、もう飽きたのかもしれない。では、もう一回、両方オフにしてください。3番目の文章です。今日、フォーラムが終わったら一杯やるつもりだ。私も。

―― はい、私も!

―― 私も!

―― 私も!

ありがとうございます。こちらのほうは納豆よりも増えました。どうぞ、後ほどおいしい酒を一杯やっていただきたいと思います。ウォームアップのゲームはこのくらいにしたいと思います。もう一つゲームを用意したのですが、それは全部終わって最後にやってみたいと思います。

インプロとパフォーマンス

自己紹介は簡単にします。今年から東京成徳大学で言語心理学や学習心理学を教えております。その他、非営利の任意団体Japan All Starsを主宰しております。「インプロで遊ぼう」ということで、今、「Me too!」という遊びをやってみました。みんなで変顔をして記念撮影を撮るというゲームも最後にやってみ

たいと思います。今、インプロもなかなか現場でできないので[編集注:フォーラム開催当時は、コロナ禍による対面接触回避の風潮で、対面でのインプロを実施しにくい状況にあった]、いろんな工夫をしている人に聞いたのですが、「Zoom上、あるいはオンライン上では、なかなか難しい」という声が聞こえてまいります。

たったの1例ですが、今、インプロというパフォーマンスゲームをやっていただきました。これは今の時代にとっても当てはまるゲームだと思います。現代は「VUCAの時代[編集注:VUCAとは、Volatility変動性、Uncertainty不確実性、Complexity複雑性、Ambiguity曖昧性の略]」と言われてたりして、先の見通せない、刻々と環境条件が変化していく、そのような不確実性や曖昧性を特徴とする時代だと言われます。今日取り上げるパフォーマンスとは、即興的、あるいは、演劇的に新しいことにチャレンジすることです。私たちが子どもの頃にしていた「ごっこ遊び」に近いものです。演劇や遊びを通して、今までの自分の殻を破って、今までにない、台本にはないような、新しい振る舞い方、新しい生き方、新しい言葉の使い方、新しい仲間づくり、ネットワークの作り方、そのようなものにチャレンジする。それがパフォーマンスであります。ということで、このVUCAの時代に非常によく当てはまるものではないかと思います。

実際に、このインプロを代表とする演劇的なパフォーマンス遊びを使って、企業の中での人間関係の改善に役立てる動きもあります。オフィスの中でいろいろ起こる、軋轢やコミュニケーションのずれをお互いに発見して、新しいやり方を作り出すところで、パフォーマンスが注目されています。この時代にふさわしい大人の「ごっこ遊び」、それがパフォーマンスだとまずは言っておきたいと思います。

パフォーマンス心理学のテーマ:あるということ、なるということ

次に「パフォーマンス心理学のテーマ」について話してみたいと思います。

パフォーマンス・アプローチ心理学は、パフォーマンスの原点とパフォーマンスの天才は赤ちゃんだと考えます。赤ちゃんはどんなふうに学んで、どんなふうに発達していくのでしょうか。生まれてわずか1年ばかりで日本語を話し始めるという、その素晴らしい

い学びと発達の天才ぶりはパフォーマンスがもたらすからだ、とパフォーマンス心理学は考えます。これは赤ちゃんだけの問題ではなくて、大人にも通じます。赤ちゃんのように学ぶことを通して、発達に再点火できるのではないかと。私のような高齢者も再び発達できる。その赤ちゃんの学びと発達の秘密を参考にするというのが、パフォーマンス心理学の考え方です。

赤ちゃんとお母さんの典型的なやりとりを思い出してみましょ。赤ちゃんが喃語あるいは幼児語で、「バアバア」と言ったりします。これは文法や語彙の観点からは日本語とは、とても言えません。つまり、赤ちゃんは日本語をまだしゃべれないわけです。でも、お母さんの適切なフォローがあれば、それは日本語として成立してしまいます。赤ちゃんは、「日本語をしゃべれないけれどしゃべれちゃう」という不思議な存在です。お母さんは、子どもの言うことを否定しようとはしません。非常に素直に、この子は日本語を話しているのだと見なして、この日本語を使う遊び、つまり日本語を使うパフォーマンスと一緒にやり遂げようとしています。お母さんと赤ちゃんの、この2人のペア、アンサンブルというのがものすごいことをしてしまう。これがパフォーマンス心理学の出発の原点です。赤ちゃんは、しゃべれないけれども、しゃべれちゃう。頭が一つ背伸びした存在になれるというのが、この赤ちゃんの学びの場の秘密です。これはわれわれ大人にとっても、重要です。大人も、もう一回、赤ちゃん時代を再現できれば、さらにさまざまなことが自分のものになる、学べる、そのような状況を作ることが重要だ、とパフォーマンス心理学は考えます。

パフォーマンス心理学のテーマを、「あるということ、なるということ」で整理したいと思います。パフォーマンス心理学は、フレド・ニューマンという哲学者と、ロイス・ホルツマンという心理学者が作り上げた考え方です。ニューマンはニューヨーク市立大学を自ら辞めてしまって、1968年からニューヨークの街場で哲学を実践するという活動を始めます。そのときに、心理学がとても不思議な学問だと感じて、心理学について考え始めました。それがパフォーマンス心理学の出発点でした。このとき特にニューマン先生が注目したのは、さっきの赤ちゃんの言葉の学び方です。赤ちゃんは、その人である、赤ちゃんで

あるという、「あるbeing」という存在の在り方をしています。しかし、それに尽きるわけではなくて、同時に今の自分ではない何かになりつつある。「なる」という存在でもある。これをニューマンはbecomingと言って、赤ちゃんとはとても不思議な在り方をしている。beingであり同時にbecomingで、誰かになりつつある、そのような存在。その二重性というのがとても不思議な存在です。

でも、よく考えると、赤ちゃんだけではなくて、私たち大人も、実はまさにこのような在り方をしている。これがパフォーマンス心理学を考える上で、非常に重要なテーマです。私は私であると同時に、他の誰かになりつつある。少し変わって、今の私ではない私になる。つまり、私ではなくなる存在だということを、赤ちゃんの学びから、パフォーマンス心理学の2人の創始者ニューマンとホルツマンは考えたわけです。

フレド・ニューマン：パフォーマンス心理学の創始者

少しだけ、フレド・ニューマンという人について触れておきたいと思います。とても面白い魅力的な人物だったそうですが、残念ながら2011年に膵臓がんで亡くなってしまいました。私は生前お会いすることはできませんでしたが、ニューマンは、ニューヨークのサウスブロンクスの非常に貧しいユダヤ人家庭に生まれました。けれども、ギフトッドな子どもというので、特別な高校に通ったりして、スタンフォード大学の大学院で哲学の博士号を取って、哲学を教え始める。母校のニューヨーク市立大で哲学を教えたのですが、時は1968年というアメリカがベトナム戦争反対とか、あるいは黒人の人権に対する運動とか、非常に揺れた時代に、大学を自ら出てしましまして、街場の哲学者になるという、まさに波乱万丈の人です。この人がパフォーマンス心理学というのを仲間たちと一緒に作りながら、30年、40年以上にわたって、ニューヨークで実践を続けている。ニューマンについてはもっともっと話を続けたいのですが、今日はこのくらいでやめておきます。

コミュニティー・ビルディング：発達の舞台をつくる

さて、さっきの赤ちゃんのお話に戻りたいと思います。赤ちゃんのように発達し学ぶ。大人になると、なかなかこれは難しいですが、赤ちゃんは、なぜそれができてしまうのだろうか。赤ちゃんは学びというよ

りも遊びに参加しているわけです。遊んでいる。そこには失敗やエラーがない。何を言っても、お母さんが「そんなの日本語じゃないよ」とか、「あなた、もっと日本語を勉強してきなさい」などとは、決して言いません。全てを受け入れてくれる。つまり失敗やエラーがない環境で、赤ちゃんは知らないことをどんどんやってしまう。そのようなリスクが取れるような環境を、お母さんが一緒になってつくってくれる。非常に素晴らしい環境であると言えます。事前に台本とか正解はありません。即興で、どんどんとパフォーマンスを進めていく。それだけでいい。その発達の環境というのは、お母さんをはじめ家族のみんながつくってくれる。もちろん、その環境づくりの主演の1人は赤ちゃん自身でもあります。そのような場所です。知識ではなくて、その場で何か実践ができることが一番重要な場所で、赤ちゃんはどんどんとチャレンジして、新しいことに挑戦していける。そのような環境であるということです。

心理学をやられた方はご存じだと思いますが、発達のステージというと、発達段階という言葉がすぐに思い浮かぶと思います。決められた発達の経路あるいは段階があって、それに従って人は発達していくのだと私たちは考えがちです。しかし、このステージを舞台と見てみましょうというのが、パフォーマンス心理学のポイントです。発達の新しい舞台で、新しい遊びや、新しい演劇や、新しいパフォーマンスをする、まさに舞台なのです。その舞台をみんなで作って、その上で赤ちゃんは日本語が話せるかのように振る舞うことができる。これは、発達を支援する、大変素晴らしい舞台なのです。赤ちゃんのように発達し学ぶというのは、これらの条件を満たすような環境を、仲間たちとつくり上げるというのが重要なのだ。そのようにパフォーマンス心理学では考えられています。

まとめますと、赤ちゃんの発達を可能にするのは、発達を可能にするその環境づくりに、一つの秘密があるということです。発達できる環境をみんなで作くりながら、その場の一員になっていく。なにか練習をして、準備段階をして、そしてその結果発達するのではなくて、まさに何かにチャレンジできるような環境をつくる。そのこと自体が発達につながるのだ。パフォーマンス心理学の中では、これをコミュニティー・ビルディングと言います。どのような振る舞いでも、認められるような、そのような素晴らしい環

境をつくること。これがコミュニティー・ビルディングです。

パフォーマンス心理学の思想：ヴィゴツキーとワイトゲンシュタイン

パフォーマンス心理学の考え方について、少し詳しく話をしたいと思います。ロイス・ブルームという非常に有名な言語発達心理学者がいますが、その人の下でPh.D.を取ったのがロイス・ホルツマンです。もともと観察を中心にした言語発達の記述的な研究をしていたホルツマンと、哲学者ニューマンを中心にして、さまざまなコミュニティー・ビルダーの仲間たち、演劇や歌やダンスなどのパフォーマー、芸術家たち、そのような人たちが集まってつくったグループが、ニューヨークにあるイーストサイド・インスティテュートという心理学の研究所です。そこは心理学による発達支援のためのシンクタンクですが、そのメンバーたちが作り上げたのがパフォーマンス心理学です。

この大本には2人の思想家がいます。1人はレフ・ヴィゴツキーというロシアの心理学者です。もう一人がルートヴィヒ・ワイトゲンシュタインです。「グループによる発達のための環境創造」をどのようにするのかに関するヴィゴツキーの考え方と、もう一つ、言葉を実践として、つまり何か実際パフォーマンスすることから言葉と心について考えましょうというワイトゲンシュタインの考え方、この二つの考え方をミックスしたのがパフォーマンス心理学です。

ヴィゴツキーについては、たくさんの方が日本でも翻訳されていますので、ご存じの方もおられるかもしれませんが。ロシアの心理学者で、「心の営みは過程であり活動だ。そのような動きの中で創られるのだ。心というものが何か個体の中にあるというものではなくて、動きの中でどんどん創られていくのだ。」そのような考え方を唱えた人です。ここでは伝記的事実を詳しく言う余裕はありませんが、37歳で死んでしまった早世の心理学者は、世界中で本が読まれており、影響力が今も続いている心理学者です。

ヴィゴツキーのアイデア：発達の再近接領域

ヴィゴツキーは、さまざまな心理学的概念やアイデアを提案しました。その中に発達の最近接領域という考え方があります。具体的な事例から入っていきたいと思います。5歳の幼児がオモチャを昨日どこかに忘

れちゃったと言って泣いている。お父さんに助けをもらって、どこにオモチャを忘れてきたのか、それを思い出すというエピソードです。

父：家にはないみたいだね。昨日は、オモチャをどこに持って行ったの？

これは心理学の中では記憶のリハーサル、過去の記憶というのを想起するために共同想起するという過程です。

父：昨日、朝、どこに行った？

子：病院に行ったよ。

父：そのとき、オモチャ持っていったの？

子：うん、持っていったよ。

父：お昼、昼食に帰ってきたときに、オモチャ持ってた？

子：うん、持ってたよ。

父：じゃあ、ご飯の後どこに行ったの？

子：その後ね、公園で遊んだ。

父：じゃあ、公園かもしれないね。ちょっと探しに行ってみよう。

というようなことで、オモチャが無事に見つかりました。このようなエピソードです。

どこにでもありそうなエピソードですが、発達に関しては非常に重要な事例になります。これはお父さんと子どもの活動です。先にも言いましたように、社会的な共同想起の活動です。この事例の中で、思い出したのは、誰でしょうか。父子のどちらか一方が思い出したといえないもので、むしろ集合的、社会的な活動です。子どもが単独で思い出したということはありません、ましてや父親が思い出したということも言えません。想起するということは2人のペアやアンサンブルやグループやコミュニティーで起こるものです。社会的想起は、私たちの周りにも、たくさん見つけることができます。例えば、広島原爆記念公園に行けば、たくさんの慰霊碑が立ち並んでいます。そこにはさまざまなグループが、自分たちの歴史的な事実について、ここにとどめおきたいということで、建立した慰霊塔がたくさんあります。これも社会的な共同想起です。つまり、記憶というのは、そのように

・発達の最近接領域：発達を最大化する、アンサンブル、ペア、グループ、コミュニティーを作り出す活動のこと。

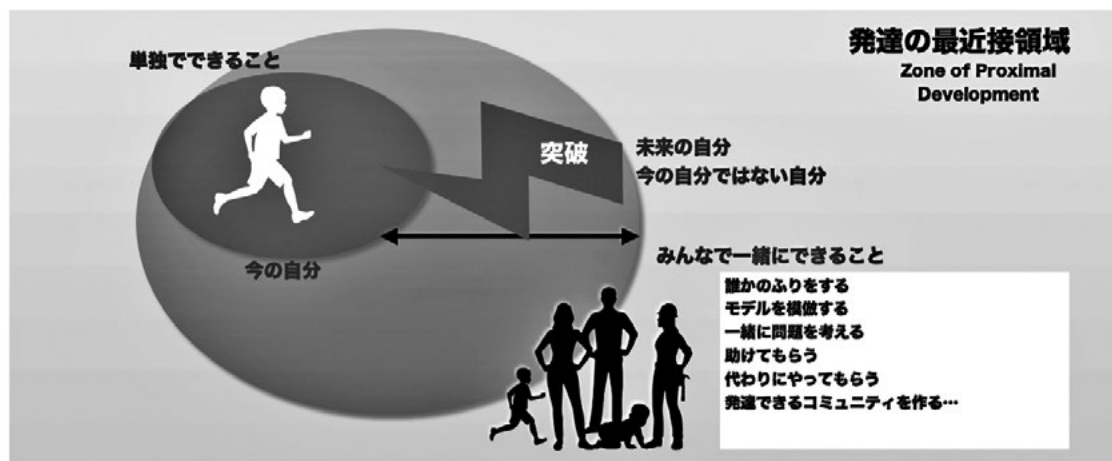


図1 単独でできる範囲とみんなで一緒にできる範囲：発達の最近接領域。

社会的で共同的なものだということです。こういうふうにして、想起を助ける発達の支援環境、これをヴィゴツキーは発達の最近接領域と呼びました。私たちは1人で何かを暗記して物事を覚えて学んでいったというよりも、このような社会的な発達支援環境の中で、たくさんのことを共同で学んでいると考える必要があります。

発達の最近接領域についてももう少し解説すると、これは発達を最大なものにする、アンサンブル、ペア、グループ、コミュニティーをつくり出すという活動を意味します。発達の最近接領域をみんなでつくり出すことで、私たちは発達できるし、他の人の発達も支援できるわけです。そのような活動であるというのが重要です。

茶色の円の中にある幼児がいます(図1)。この茶色の円は、子ども単独でできる範囲であり、この茶色の円が今のこの子の姿です。つまり、さっきの「ある」、beingという範囲を示しています。でも、みんなと一緒にになにか活動すると、何か違うことができるようになっていきます。未来の自分の姿を指し示すような、今の自分ではないような活動が起り始めます。みんなで一緒ならば「誰かのふりをする、モデルを模倣する、一緒に問題を考える、助けてもらう、代わりにやってもらう」ことが可能になります。こうして、この男の子は今の自分の限界を突破して、自分では

ないものになる、becomingする存在でもあります。その二重の存在、二重の在り方というのをこの図で示すことができます。これがヴィゴツキーの発達の最近接領域なのです。

発達の再最近接領域をつくる

このような発達の最近接領域をつくるために、私たちの研究グループでは、広瀬拓海氏を中心に、東京の足立区の、経済的に恵まれない子どもたちと一緒に舞台づくりをしながら発達支援をやってみました。音響係や照明係も子どもたちがやって、みんなでショーを作る。彼らはショーを作っているわけですが、同時に、ショーの告知ポスターを作るにはどのようにしたらいいか、あるいはショーを計画的に運営するためのタイムテーブルをどのように作ったらいいか、ショーの参加者を募るには何をしたらいいか、そのようなさまざまなことを活動の中で学んでいくことができました。これは発達の最近接領域になっています。

もう一つ、パフォーマンス心理学の発達の最近接領域の事例としては、就労で苦戦している、いわゆる引きこもりといわれるような人たちと一緒にコミュニティーをつくりながら、みんなで自分たちが生き生きと活動できる場所を、どのようにつくったらいいのかという実践をやってみた事例もあります。詳しくは、

たとえば、北本・茂呂(2020)の論文にまとめましたので、それを見ていただくとありがたいと思います。パフォーマンス心理学に含まれる、このコミュニティづくりは、非常に重要なものです。そのことをお示ししようとして、以上の二つの事例について触れました。

パフォーマンス心理学の実践：哲学することとジェレミーの事例

話をさらに先に進めていきたいと思います。パフォーマンス心理学では、実際どのような実践活動をするのか。これは先ほど出てきたウイトゲンシュタインの考え方を応用している部分です。それは一言で言うと、哲学することです。哲学することで、言語実践や言語活動をさらに前に進めることです。

哲学するというのは、何だか小難しそうですが、ウイトゲンシュタインに従えば、それは「考えるな」ということです。むしろ、よく見なさい、言語を実際に使っている現場をよく見なさい。それによって、「哲学的な誤り」や「哲学の病」とウイトゲンシュタインが呼ぶような、自分がとらわれていた中途半端な不明確な見方を発見し克服することができますよというのが、ウイトゲンシュタインの哲学することです。これはとくに難しいことではなくて、私たちの言葉の使い方、言葉を実践するというに照らして、その言葉の使い方は本当に良い使い方なのかどうかを振り返ることが、哲学することの意味なのです。

少し抽象的なので、事例をまた出したいと思います。パフォーマンス心理学の臨床面の実践は、ソーシャルセラピューティクスと言われます。この事例は、クリスティン・ラセルバというセラピストが行った、グループセラピーの事例を一部抜き出したものです。これについて考えてみたいと思います。

広汎性の発達障害と診断されているジェレミー君は、6歳の男の子です。学校の中ではチャレンジする課題が何も用意されてない。つまり、この子は障害がある子どもだからという理由で、何か学んで、今の自分を超える、今の自分を突破する、そのような場面が何も用意されていない。そのような子でした。お母さんがこのことを非常に心配して、いろんな相談機関を訪ね歩いて、その中でソーシャルセラピューティクスに出会いました。

母親がジェレミーを連れて、ラセルバの所に相談

にやってきたわけです。いわゆる自閉スペクトラム症と診断されていて、共感や思いやりに欠けていて、他人の立場に立てない。そのような行動特性を持った子だと診断されている。母親も、「この子はそういう子なのだ。思いやりがない。他人の立場に立てない。」と思い込んでしまっている。この思い込んでしまっているというのが、哲学するというところから見て、果たして良いのか、セラピーの中で探求が始まります。そのような事例です。ソーシャルセラピーでは、最初の相談面接の場面から、何度かインテークと個別相談をして、確かにこの子は自分たちとやっていける、母親もやっていけそうという判断ができれば、グループセラピーの場に進みます。

ここで紹介するのは、5回目のセッションの部分です。ジェレミーが熊さん遊びをしたいと言うのですが、セラピスト(クリスティン・ラセルバ)は今日は具合が悪いと言って、熊さんあそびはできないよと言います。しかしジェレミーは熊さんあそびしようと執拗に要求を繰り返します。お母さんはそれを見て、ため息をつきながら、セラピストのクリスティン先生が病気になるのに、ジェレミーは何の気遣いも見せないと言いつつ出ます。このときにラセルバは何を言ったか。ジェレミーは何の気遣いや心配りも見せないと言いつつ母親が言ったときに、「どうやって、ジェレミーが気遣いできないと分かったのですか。ジェレミーは、ただ、熊さんあそびをやりたいと言っただけですよ。その発話の背後に気遣いというものがある、それがこのジェレミーの行動や発話を決定している、そのような過剰決定というのを想定する必要が本当にあるのですか。」とラセルバは言います。

これがラセルバの問いです。これは極めてウイトゲンシュタイン的な問いです。言葉があって、その言葉が何か出来事や事態を意味する。一方的に意味する。明確にそのように意味するという想定が、なぜ可能なのですか。ジェレミーは熊さんあそびをやりたいと言ったとき、その意味は、さまざまな意味に解釈可能であるし、さまざまなことを表せるのではないのでしょうか。私たちが言葉を実践するというのは、そのさまざまな言葉の中から、適切なものを見つけ出すということなのであって、ジェレミーが自閉スペクトラム症と診断されているからといって、ただそれを理由に熊さんあそびをやりたいというジェレミーの発話を、一方的に切り取ってしまうということが、本当

にできるのでしょうか。これがラセルバの問いです。

ちなみに、ここでいう熊さんあそびというのは、熊には何の関係もなく、ジェレミーがお父さん役になって、ラセルバが子どもになる。アメリカの例ですので、子どもの寝室と両親の寝室が別で、寝る時間になったら子どもは寝室に行かなくてはいけない。それに駄々をこねる。その子どもと父親の様子を、ごっこ遊びですというパフォーマンスです。これが熊さんあそびの正体なのですが、これをやりながら何が起こったのか。このときはお母さんに部屋から出ていってもらって、「じゃあ、今日は頑張って、熊さんあそび、私するから」と言って、セラピストはジェレミーと遊びを始めるわけです。その中で、やっぱり調子が悪いので、ちょっと気分が悪いのよというふうに言うと、ジェレミーは「どうしたの？ 大丈夫？

きょう昼間、飛び跳ね過ぎて遊び過ぎたから、疲れちゃったんじゃないの？」とか、「熱いお茶を持ってきてあげるから、それで気分が良くなるに違いないよ」とか、かいがいくケアするわけです。このケアするジェレミーの様子をお母さんに聞かせると、「え？ そんなことがあの子にできるの？」というふうに、お母さんは驚くわけです。この子は自閉症だというラベルをつくり、それでもって全ての行動を解釈して、一方的に思い込みを強めてしまったお母さんは、こんなことができたのかとびっくりするわけです。

パフォーマンス心理学を実践する人々は、哲学するというのをいろんな場面で実際にやってみます。言葉の意味というのを、そのように勝手に決めつけていいのだろうか。いろんな解釈の可能性があるのではないか。今、どのような意味で言ったのか。さらに話し合ってみたらいいのではないか。決めつけずに、いろんな意味の可能性をつくったらいいのではないか。これで足りなければ、もっと新しい言葉遣いをみんなで作ればいいのではないか、とさえ言うわけです。これがパフォーマンス心理学における哲学するというものの意味です。難しいことではなくて、さまざまな言葉の可能性を、遊びながら楽しく探ってみるというのが、ウィトゲンシュタイン流に哲学するというものの意味だと言えます。

まとめますと、言葉をその現場、実践の場、コンテクストから理解する。単語が事物を、語の集まりが出来事を指し示す。こういうふうに私たちは普通に考

えがちです。これが教科書にも載っている、あるいは大半の言語学が採用する語と文の定義になると思います。しかし、この言語の捉え方は非常に不明確な「像」だ、「ピクチャー」だと、ウィトゲンシュタインは批判します。この不明確な図式、単なるイメージ、思い込み、これを突破して、本当にその場の実践の中で、どのような意味が込められているのか、みんなを確認し合おうというのが、パフォーマンス心理学における哲学することの意味です。

ちなみに、この言葉の指示説といわれる、語の集まりの文が出来事を指し示すというのは、アウグスティヌスが考えた言語像です。これは非常に限定された範囲の中で、単純な言葉の使い方の場合には有効です。実際、りんごといえばりんごであるし、パソコンといえば私が使っているパソコンを指し示す。こういう簡単な事態、単純な事態、手に取って扱うことができるような事物がその場において、それと言葉を対応させるというような場合には、これは有効な言葉の使い方であるわけですが、私たちの複雑極まりない心の営み、あるいは私たちの心の在り方をさらに発達させていく、その支援に使うような言葉の場合には非常に使い勝手の悪いものなのだというのが、パフォーマンス心理学の言葉の実践に対する考え方です。

ウィトゲンシュタインのアイデア：ピクチャー、アスペクト転換、言語の創造

ウィトゲンシュタインについては伝記も何種類も出ていますが、非常に面白い哲学者です。「西歐哲学を転覆し破壊した」と評価される人でもあります。大変なお金持ちで、19世紀の末から20世紀初頭のウィーンの大財閥、鉄鋼王といわれる父親のもとに生まれたのですが、自分の財産を兄弟や芸術家たちにほとんどあげてしまって、無一物で学校の教師をしたり、哲学者としてイギリスで苦勞をする、あるいは第1次世界大戦の最前線まで出ていくとか、自分の生きることの意味と戦い続けたというような人物です。その彼の最終的な結論というのは、言葉の使い方を実践の場に引き戻せという話です。

円の部分に注目してほしいのですが（図2）、ウィトゲンシュタインの方法というのをもう少し整理すると3つの実践から理解できます。第一は、言葉の意味が不明確な像の下に捉えられていることを自覚的



図2 ウィトゲンシュタインの方法についての整理。

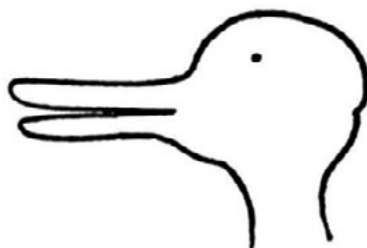


図3 うさぎあひるの図。

に発見していくという「像」の実践です。第二に、アスペクト体験という隠喩による、意味のずらしの実践があります。そして、最後に言語の創造実践があります。このような、3段階の実践に整理できるように思います。

第一は、不完全なイメージ、図柄、ピクチャー、これを見つけることです。像を見つけるということを通して、言葉の理解の限界、私たちの言葉の使い方の限界を明確にしていきます。それを通してアスペクトの煌めきを体験する。『哲学探究』に載っている非常に有名な例は、アヒルウサギという図ですが(図3)、これがウサギになったり、アヒルになったりする。これがアスペクトの転換です。これはウサギだったのだ。これはアヒルだったのだ。そのアスペクト転換を経験する。その中で生き生きとした意味に出会う、というのがアスペクト体験です。このような経験ができるような、新しい言葉実践を作り上げましょうというのが、パフォーマンス心理学における言葉のエクササイズです。

パフォーマンス心理学の実践：バーバラ・テラー・スクールの事例

最後の事例は、ホルツマンとニューマンが、1985年から1997年までニューヨークで開いていたバーバラ・テラー・スクールという学校です。1994年に東京シューレ [編集注：主に不登校の子ども・若者が所属するフリースクール] の一行が訪問したというような話を聞きつけまして、いろいろ本を探ったところを、そのときの記録が書かれたものがありました。この学校は非常に変わった学校で、子どもたちが自分たちで毎朝今日は何をするかというのを計画して、運営していくという、非常に稀有な学校です。その日の朝、みんなで計画をして、たとえば今日は科学についてみんなで考えようということで1日が始まるわけです。小学生から高校生までいるので、それぞれの学年に応じて、いろんなことをする。上位の学年では大学に行くための準備とかいうのをしている子どもいますが、基本的には演劇的な手法に基づいた遊びとパフォーマンス中心の学校です。その中でいろんな障害を持った子どもなども通っていて、その障害を克服するために演劇的な手法で、従来の思い込みに

とらわれた学びを越えていくということをするのが、バーバラ・テラーズクールです。

その中にジャスティンという11歳の痲痺持ちの子がいます。自分の予想を外れたようなことを、あるいは予定にないようなことを言われると、その場で痲痺を起こして、床に寝転がって、手足をばたばたさせて、泣きわめくというような子だそうです。

紹介する事例は、レンという大学院生の学習を支援してくれるボランティアの人と一緒に、サーカスの道化が演じるコマーシャルのシーンをパフォーマンスしている様子です。サーカスの中にはテレビのコマーシャルのように、時々、道化が出てきて、いろいろな製品を紹介するという時間帯があるようなのですが、それを遊びでやっている。まず、レンが、「ジャスティン、今日は言語療法士の所に行けなくなったよ」と言います。そうするとジャスティンが、通常のジャスティンをここでは演じてみせます。叫び声を上げて、かんしゃくを起こして、床に寝転がって泣きわめくということを行います。それが一段落したところで、レンが観客を見渡した後、封筒から紙で作った小さな玉を取り出して、ジャスティンの口に持って行って、ジャスティンはこれを飲んだかのようなパフォーマンスをする。これは薬ごっこです。そして高らかに、「魔法のお薬、マチョーレ・パルツ（成長したというような意味）」とスペイン語で言います。成長させる不思議な薬ということでしょうか。ジャスティンは薬を飲んだふりして、もう一度さっきのシーンを演じ始めます。レン「ジャスティン、今日は言語療法士のところに行けなくなったよ」。ジャスティンは静かにレンを見上げて、「そうなの、じゃあ家に帰ろうかな」と言う。このマチョーレ・パルツのコマーシャルが終わる。そうすると観客の他の子どもたちや教員たちが、拍手喝采を送る。こんなようなシーンが報告されています。

バーバラ・テラーズクールに関する報告書の中に、この部分を見つけて、非常に面白いなと思いました。つまり、自分ではないものを演じることで、今日は言語療法士の所へ行けなくなったよという同じ言葉、表面上同じ言葉、言語形式上同じ記号が全く違う意味を持つ。そのような発達の環境に置かれた場合にどのようになるかというのを子どもたちと支援する教員、大学院生たちでつくり上げていく。そのような場をつくっている。バーバラ・テラーズクールは全ての学びがこのように、ごっこ遊びで構成さ

れます。遊びを通して新しい言語の可能性を見つけ、いく場になっていました。これが、言葉の使い方を振り返ることで、新しい言葉を生み出していくというウイトゲンシュタインの考え方に沿ったパフォーマンス心理学の言語の実践となります。このようなコミュニティー・ビルディングの手法と、言葉の実践を変えていくというのがパフォーマンス心理学の方法論です。

パフォーマンス心理学入門に向けて

今まで話をしてきましたこと、簡単にまとめてみたいと思います。パフォーマンス心理学のポイントは幾つかあります。まずパフォーマンスとは何かというと、普段やらないことに、あえてチャレンジすることだと述べました。普段どおりにやっていること、それをあえて壊して何か違うことをやるというのが、パフォーマンス心理学におけるパフォーマンスの意味です。2番目のポイントは、発達に再点火ができるということです。お母さんや家族と一緒に赤ちゃんが自分の言葉を最初に学び始めたそのときのように、大人も、赤ちゃんのようにパフォーマンスを通して、もう一回、発達に火を付けることができる。3番目は、コミュニティー・ビルディングを通して発達環境を創造するということです。これはヴィゴツキーの発達の最近接領域の創造というアイデアから来ています。最後がウイトゲンシュタインから採用されたポイントで、言葉の像というのを理解する。言葉の不完全な使い方、不完全なのにどこにでも当てはまるように言葉を理解してしまうという、その言葉は像なのだというのを理解する。それをずらして、アスペクト転換の煌めきを発揮するような、そのような新しい言語表現を創造する。これが、パフォーマンス心理学の4番目のポイントです。以上の4点について、今日、お話をしてきました。

以上で私の発表は一度終わりにしたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

質疑応答：パフォーマンスにおけるリアリティとオーディエンスのパフォーマンス

— 私に関心を抱いたのは、パフォーマンスにおける「リアリティ…本当らしさ」「ファンタジー…虚構。だから思い切ってやれる。」を、パフォーマンス心理学の研究者・実践家はどう捉えているかという

ことです。リアリティが無ければ面白くないし、リアルでないパフォーマンスは「ふだん（日常生活？この表現でよいのかわかりませんが）」に浸透していかないために、「みんなで発達」を実現できないようにも思われます。ジャスティンやジェレミーにとって、一連のパフォーマンスにはリアリティがあったのだろうと想像します。一方で、パフォーマンスには、「虚構だから安心してできる」という側面もあるように思われます。パフォーマンスは現実でないからこそ、事例のように薬を飲むことも、場合によっては変身したり、死んだりすることも可能です。だからこそ思い切って変われるのではと想像します。そのあたりの捉え方やバランスといったものを、どのように捉えていらっしゃるのか、お聞きしたいと感じました。

非常に鋭いというのか、深い質問をいただきました。リアリティー。

―― 茂呂先生。上記を書いてから思ったのですが、私のパフォーマンスの捉え方は、演じるということに狭めてしまった質問かと思いました。もっと自覚なくやることとか、ちょっとやってみるみたいなことも、パフォーマンスに入っていますよね。

広くはそうですが、割と自覚的にあえてやるようなことを想定しています。ただ、リアリティーの問題については、考えることが必要な、重要な質問だと思います。今日の事例で挙げたもの、お父さんと子どもの共同で想起するというものは、ごく普通の家庭生活に出てくるようなものだと思うのですが、バーバラ・テラー・スクールの事例とかは、痲痺ということ自体にとっても苦しんでいる子どもがやるわけですから、リアリティーもある。でも、リアリティーがあって、普通はできないのだけれども、サーカスの場面を設けることで、みんなから拍手喝采してもらえる、そのような承認の場が演出できると、非常に面白い発達の展開になるということだと思います。

バランスという言葉で仰っていますけれども、あまりにリアリティーがきつ過ぎて演じることができない場面も当然あると思いますし、その問題で非常に苦心していて、とてもそれを取り上げることができないということも、当然、一方の極にはあると思うのですね。なので、ある程度それを遊びで取り上げるこ

とができるような、そういう環境が一番の条件だと思います。それはやはりコミュニティーだという気がいたします。何をやってもいいというのをお互いに認め合うという前提が互いに共有されている環境ならば、やってもいいですよということになると思うので、出すのがつらい、でも出してみてもいい、それを受け止めてくれそうだという、信頼とか、メンバー同士の親しみやすさとか、インティマシーというのがある、それを条件にその中でなにかやってみる。それを遊びとして受け止めて、正解はないのだよねというのを、うまいこと共有できるような、そのような環境づくりが条件になるのかなと思います。

―― ありがとうございます。ある種の緩さが必要ということとか、演じ手同士だけではなくて、見ているオーディエンスへの信頼感というの、大切な要素になるのだなというのが、お答えを伺って分かりました。ありがとうございます。

彼らもニューヨークで、オールスタータレントショーネットワークという、年に1度の大掛かりな催しをやります。ニューヨーク市内の各地域から出てきたグループが舞台上で踊ったり、みんなでコーラスしたり、歌ったり、演劇をしたり、自分で楽器を演奏する子どもとかがいるのですが、オーディエンスについてはまず訓練をします。「今日はなんかやったら、みんなですごい拍手をするんだよ」とか、プラカードを上げて「拍手してください」とか、そういう係もちゃんとつくっています。私は、そのプラカードを上げる係に急に任命されて、やらざるを得なくなってしまって、参加したことがありました。支援的な環境というのを、みんなでまずはつくるというのが、このショーの成功の鍵を握っているのだというのを、重々、大人が子どもたちに説明します。ブーイングなんかしようものなら、もう張り倒されそうな、そういう環境をつくる。そういうのがあって、初めてできる感じでしょうか。

―― ありがとうございます。オーディエンスもパフォーマンスするというのでしょうか。

そうですね、まさにおっしゃるとおりだと思います。それもパフォーマンスなのだと、オーディエンス

というのは、こうあるべきものだよねというのを納得させる。そういうことを事前に説明している。

質疑応答：発達の道筋を（再）起動したいという欲望はどのようにしてくれるか

―― いま、孤立やいじめの被害を受けていたり、あるいは不登校や引きこもりの状態に陥っている人たちに、自分の置かれている状況を相対化して別の視点を持ってもらい、再び発達の道筋を進んでいけるような支援をする際、その切り口というか、出発点は、どこにあるとお考えでしょうか。

とても重要な問題だと思います。孤立、いじめの被害というのに、私は直接的に出会った経験があまりないのですが、不登校、引きこもりという場合には、まずはグループとして活動できるかどうか、一番重要ですよ。私はその点はいろんな人に助けていただいて、既にある意味でコミュニティーづくりが多少進んでいる所に、後から入らしてもらおうというような経験しかありません。ですので、それをゼロから立ち上げるというようなことをされているという方には、本当に頭が下がる思いです。出発点は、やはり、コミュニティーづくりであったり、一緒にやり始めると面白いよという、そのメッセージを、どうやって受け取っていただくかということだと思うんですよ。

事例の中で挙げた北本遼太君が中心になって進めた、茨城県北西部のほうでの就労に苦戦している青年たちとの会というのは、それを何とか拡大しようと思って、かなりの所にビラを配りに行ったりとか、仲間を募るいろんな試みをやったのですが、なかなか増えませんでしたね。唯一、1人だけ途中参加してくれた人がいて、その方は別の機会にインプロゲームを半年間一緒にやっていた人だったので、その人は最後まで残ってくれて、今度は自分が支援する側に回るという、少しハッピーエンド的なものになりました。けれど、なかなかこのコミュニティー・ビルディングの段階というのは、非常に手間暇、時間がかかりますし、なかなか成果が得られないところではないか。むしろ質問者さんのほうから、いろいろアイデアがあったら、ご経験の上からお話をいただけるとありがたいと思います。

―― 来ていただきたい方というのは、なかなか来てくれない。別に来なくていいよという方が来てくれることが多いです。パフォーマンスをすれば、自分自身の価値観についても見直しができるし、育ち直しというか、新たな発達の道筋に立つと分かるのだけれども、そこへどういうふうに来ていただくかということは難しいなと思いつつ、今、先生のお話を聞かしていただきました。外から見ている面白いかということ、気付いてもらう接点のような、一番、外周のところの働き掛けみたいなものがあるのかなということを感じた次第です。

今、仰っていた、ターゲットにしている人はなかなか来てくれなくて、割といるんなリソースやキャピタルがある人のほうが、支援的な場面に顔出ししてくれたりするというのは、本当に私も実感として分かります。そういう場をいくらつくっても、「あなた、あんまり困ってないんじゃないですか」という人がそういうのを見に来てくれて、面白がってくれたりして。本当にそこは同感するところであります。今のその一番の外周のところ、心に訴えるような、そういうものというのは非常に重要だという気がしますね。

ニューヨークのグループがやっていたのは、むしろ子どもたちのほうが勝手にやっているものを取り上げる。彼らは1970年代以前から、発達支援が必要な子ども、貧困の黒人系とかラテン系の子どもたちを集めるという、それをやっていたのですが、ちょうどそのときに、あちらでストリートカルチャー、ストリートパフォーマンス、ラップとかストリートダンスとか、DJとして音楽をかけるという、それが始まった時期で、まさにそういう子どもたちの発表の場を彼らが提供するという戦略でした。ですので、そういう少し不良文化でもあり、クールなものとか、そのようなものをみんな懂れてやっているけれども、それを他の人に見せる場所がないので、そこに目を付けて、教会の地下室でラップの発表、ダンスパフォーマンスを発表する場というのをやるから来てねということで、リクルートしていったと聞いています。そのような、むしろ子どもたちの中で、今、流行っていて、一番いいものというようなもの、目の付けどころかなというふうにお話を伺って思いました。

質疑応答：リモート環境でのコミュニティづくりについて

―― パフォーマンス心理学というのを系統的に伺ったのは今回初めてで、大変、関心を持ちました。発達の最近接領域というお話をなさったときに、その中でアンサンブルとかペアとか、コミュニティとかグループ、そのようなものをつくり出すということをお話しなさいましたけれども、ちょっと手あかの付いた質問かもしれませんが、コロナの中で難しくなっている側面というのではないのか。つまり、コロナ禍の中で顔が半分しか見えない、言葉はマスク越しでしか聞き取れないというような状況において、コロナの中で生きる子どもたちのみならず、大人たちがこれからそのコミュニティづくりに向けて、どのような活動をしていけばよいのでしょうか。

ご指摘のように、発達の最近接領域にしる、発達の間をみんなでつくるというイメージにしる、対面での対話が前提になっているというのが、どうしてもありますよね。その場合、このコロナの影響は非常に甚大であるわけですが、それでもなにかできることはないかなど考える必要もあると思います。今、感じているのは、遠隔で今までなかなか会えなかった人は、リモート環境が逆に非常に気楽に、世界中どこからでも一緒に話ができる。そこはありがたいところがありますよね。ですので、遠隔で話すという、そのような必然性がある子どもたちと、むしろ出会うことはできないのか。例えば、もともと既往症があって、なかなか対面で会えないような長期入院中の病院内の学びの場にいる子どもたちとか、そのような子どもたちは、むしろこのリモート環境が必然的な環境になるのではないかと思います。そういうところで一緒にワークとか、いろんな話し合いを進めていくことができるのではないかと考えていたりしたこともありました。

もう一つは外国、あまり時差がないような国々、例えばオセアニアの子どもたちと日本の子どもたちをつなげて勝手にしゃべってもらって、英語を学ぶような場を演出するとか、遠隔であることの強みを活かすようなプログラムを、何かつくることで、対面、対座ではできないのですが、遠隔で何かしているという、そういう発達環境の支援というのも夢物語かもしれませんが考えたことがあります。海外の大学と、常

時、回線をつないで、勝手に学生同士が話をするような環境を、もしつくれたら、勝手に英語を学ぶ。教えるのではなくて学ぶ、そのような場が演出できないかなということは、具体化しようと考えたこともありました。

質疑応答：リモート環境でのコミュニティづくりについて

―― このパフォーマンス、非常に幅広いやり方があると伺いましたけれども、できるだけ実施担当者のスキルがそこまで必要とならないものが一般には普及すると思います。先生のこの実践については、最低限このぐらいのことは何か必要だというのがあれば、お聞かせいただきたいと思います。

前任校では大学院生たちと、いろんな場に行つて、インプロのゲームをやるとか、そこでインプロリーダーになってみてなにかやってこいとか、いろんなことをやってみましたけども、最低限、もう人前に立てないということではなければ、まあまあいけるような気がいたしております。アイスブレイクとか、エンカウンター段階でのゲームはたくさん用意されていて、一緒に輪になってボールを回し合うとか、そのボールを回すときに感情を込めるとか、直感的にすぐ分かるようなもので、それはすぐに誰でも一度やってみればできてしまうと思います。

ただ、もう少し演劇的な手法が高度化した場合に、なかなか難しいところもあると思います。パフォーマンス心理学の中では企業向けのパフォーマンスゲームとして、Performance of a Life Timeという手法があり、演劇のスキットのようなものですが、まず1分間で自分の人生を演じなさいという、すごい難しい課題が出てくるのですよね。参加する側としても1分間で自分の人生の意味をパフォーマンスして、人に示すのは、なかなか恥ずかしさもある。難しいところはあります。その勇気を振り絞ってやってみた。その後、演劇リーダーのほうに求められるものは、それを洗練させて、一つの演劇的なパフォーマンスに仕上げるというようなことをしたりするのです。これはそういう演出の経験であるとか、いろいろ自分が舞台上に立った経験とかがないと、難しい場合もあるかなという気がいたします。そういう演出チームがニューヨークのグループのほうは用意されていまし

て、自分たちの劇場まで持っていたりするのですね。42丁目の10番街というので、まさにブロードウェイミュージカルのお膝元に自前のビルを持っていたりしまして、そこに劇場が三つあるというような施設を持ってまして、そのリソースの中で、たくさんの演出家なども出入りしたりしている。大半、ボランティアなのですが、その人たちがやってくれるということで、演劇的な手法を本格的にやろうとすると、そのような場としての劇場というのが仕組みとしても、そこに出入りするさまざまな演出家、照明、それと、その他のプロのスタッフのボランティアに頼るということが、どうしても必要になるのかなと思いました。

—— そういう連携が必要ですね。なるほど。分かりました。

そういうのに興味を持って、ボランティア活動が非常に熱心で、ボランティアとして活動するという場合、一つの社会的な貢献になっているという場合には、そういうことも可能なのかなという、その辺の寄付文化の背景の違いというのも大いに感じました。

質疑応答：高齢者も再び発達できる事例

—— 「高齢者も再び発達できる」とございましたが、もしよろしければ高齢者の事例としてどのようなことがあるか教えていただけますでしょうか。

まさに、この高齢者の事例は私自身でありまして。今、65を超えて後期高齢者になりましたが、このパフォーマンス心理学というのをやろうと、ニューヨークに何度も行って、あっちで勉強してこようと思ったのは10年前でありました。その前からロイス・ホルツマンやフレド・ニューマンは、書籍の上では知っていたり、学会で話をするというようなことはあったのですが、本格的にニューヨークに行こうと思ったのは55で、大学人生活もあと10年かなと思ったときに、「なにかチャレンジしよう。そのような形で自分自身も、あと研究も、もうすぐ終わりと決めつけるのではなくて、何とかそこを奮い立たせて、次に行こう」としたのが10年前でありました。あまり大した事例ではありませんが、高齢者の事例として、そういうものもあったりします。

あとニューヨークのグループの非常に面白い研究

で、認知症自体を楽しむというか、認知症の見方を変えるようなことをワークショップでやったりとか、それを演劇にしたりという形で、年を取る、エイジングということの意味を変えてみようというようなこともやっているようです。また、ご紹介できる機会がありましたら、紹介したいと思います。

—— 私も自分が60を超えて、自分が取り組むこととして何かできることがあるのかなという関心から、実は伺ったものですから、大変ためになりました。どうもありがとうございます。

ありがとうございました。

講演内で紹介のあった関連図書・文献

- Hirose, T., & Moro, Y. (2019). Socio-Material Arrangements of Impoverished Youth in Japan: Historical and Critical Perspectives on Neoliberalization. *Mind, Culture and Activity*, 24(2), 95-109.
- Holzman, L. (2009). *Vygotsky at work and play*. Routledge.
(ホルツマン, L. 茂呂 雄二 (訳) (2009). 遊ぶヴィゴツキー——生成の心理学へ—— 新曜社)
- Holzman, L. (2018). *The overweight brain: How our obsession with knowing keeps us from getting smart enough to make a better world*. East Side Institute Press.
(ホルツマン, L. 岸 磨貴子・石田 喜美・茂呂 雄二 (編訳) (2020). 「知らない」のパフォーマンスが未来を創る——知識偏重社会への警鐘—— ナカニシヤ出版)
- 香川 秀太・有元 典文・茂呂 雄二 (編) (2019). パフォーマンス心理学入門——共生と発達のアート—— 新曜社
- 北本 遼太・茂呂 雄二 (2020). 「交換形態論」の再評価と「パフォーマンスとしての交換」への拡張——学習のアレンジメント形成における感情の役割——
認知科学, 27, 44-62. <https://doi.org/10.11225/jcss.27.44>
- Lobman, C., & Lundquist, M. (2007). *Unscripted learning*. Teachers College Press.
(ロブマン, C.・ルンドクウイスト, M. ジャパン・オールスターズ (訳) (2016). インプロをすべての教室へ——学びを革新する即興ゲーム・ガイド—— 新曜社)
- Newman, F., & Goldberg, P. (2010). *Let's Develop! A guide to continuous personal growth*. All Stars Project, Inc.
(ニューマン, F.・ゴールドバーグ, P. 茂呂 雄二・郡司 菜津美・城間 祥子・有元 典文 (訳) (2019). みんなの発達! ——ニューマン博士の成長と発達のガイドブック—— 新曜社)
- Newman, F., & Holzman, L. (2006). *Unscientific Psychology: A cultural-performatory approach to understanding human life*. iUniverse.
(ニューマン, F.・ホルツマン, L. 茂呂 雄二 (監訳) (2022). パフォーマンス・アプローチ心理学——自然科学から心のアートへ—— ひつじ書房)
- Newman, F., & Holzman, L. (2014). *Lev Vygotsky: Revolutionary Scientist*. Psychology Press.
(ニューマン, F.・ホルツマン, L. 伊藤 崇・川俣 智路 (訳) (2020). 革命のヴィゴツキー——もうひとつの「発達の最近接領域」理論—— 新曜社)
- Salit, C. (2016). *Performance breakthrough: A radical approach to success at work*. Hachette Books.
(サリット, C. 門脇 弘典 (訳) (2017). パフォーマンス・ブレイクスルー 壁を破る力——今ここにある限界がみるみる消える! 驚異のメソッド—— 徳間書店)
- Wittgenstein, L. (1953). *Philosophische Untersuchungen*. Basil Blackwell.
(ワイトゲンシュタイン, L. 藤本 隆志 (訳) (1976). ウイトゲンシュタイン全集第8巻哲学探求 大修館書店)